
幻燐の姫将g.....いいえ、槍兵です。

waster

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻燐の姫将g……………いいえ、槍兵です。

【Nコード】

N5768Q

【作者名】

w a s t e r

【あらすじ】

俺、死にました。

そしてテンプレ通りに能力をもらって転生した先は……………

初投稿です。そして執筆自体はじめてです。すごく駄文となりますが生暖かい目で見守って下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

生暖かい目で見守って下さい。

ブローグ

え〜っと、死にました。そしてただいま白い空間に居ます。
え、いきなり何かって？

いや、おきた事をそのまま言うと、田舎の田んぼ道をチャリで走っている 車ツツコんでくる 避けようとして、こける こけた先、高圧電流が流れている鉄線 アババババババババババババババ そのまま気絶して田んぼヘドボーン。てな感じ。

クソ、ボーイスカウトのキャンプなんて来なければよかった。

そういえば、俺の名前を言っていなかったな。

俺の名前は、柴本将人（シバモトマサト）。16歳のピチピチの高校二年生だ！！ちなみに成績は、最下位だ！！え？威張ることじゃない？

ゴホン、しかし俺にはまだやるべき事があったんだ。主にエロゲとか、エロゲとか、エロゲとか、エロゲとか、エロゲとか、あとエロゲ。

やべえ、エロゲしかない（^ー^；）

でも、マジでどうしよう？

死んだから俺の部屋が家宅捜査される〜。やめて〜、俺の宝（エロゲ）をみないで〜！！

「あゝ、もしもし？」

「んあ？」

俺が床で悶えていると、誰かが話しかけてきた。

「えゝと、アンタ誰？」

俺が声の方を向くと、幼女がいた。

「私は、神です。」

ふゝん…かみ…紙…髪…神？

イヤイヤ、無いだろ。こんな幼女が神様だなんて。

俺の聞き間違いだ。かみ…k a m i…k a i…カイ！！

分かった、この子の名前でカイっていうんだ。

「えゝと、カイちゃん？此処はどこ？」

「カイちゃん？私の名前は天照大神ですよ？」

へ？天照大神って神様じゃん。しかも、世界初めての引きこもり。
世界初のニート！まさしく、ニート神！！

「それで、そのニート神が何の用ですか？」

「えゝと、言いくいのですがアナタが死んだのは私の責任です。」

あれ？ニート神についてはスルー？

「どうしてですか？」

「アナタはあの時、車にひかれて植物人間になるはずでしたが、」

植物人間って、死ぬよりひどいじゃん！！

「人の人生が書いてある紙にインクをこぼしてしまい、アナタは死んでしまいました。スミマセンでした。」

ん？これってもしかして…

「お詫びとして、アナタには転生してもらいます。」

キター＼（＾ｏ＾）／

「そして転生してもらう時に、特典として、能力を与えます。」

テンプレだな。

でもどうしようか？普通だったら、チート能力もらってオレTUE
EEとなるが、最強すぎるのもな。

よし決めた！！

「それじゃあ、F a t eのランサーの身体能力と槍の技量とアサシ
ンの刀の技量をください。」

これぐらいだったら最強とは言えないだろう。

「わかりました。あと、ついでに顔をランサーにしておきます。」

お、ラッキー。俺の顔ブサイクとは言えずとも、イケメンではないしな。

「ありがとうございます。」

「では、転生先におくります。第二の人生楽しんでくださいね。」

ニート神（結局何も反応無かったなあ）がそう言う足下に黒い穴ができて浮遊感が俺を襲った。って、

「ギャ~~~~~」

俺は絶叫マシーンが大の苦手なのだ。

（そういえば、どこに転生するか聞いてねえな。）

そう思いながら、俺は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

間違いなど指摘がありましたら容赦なく言ってください。
感想おまちしております。

一話

「オギヤアアアアア（知らない天井だ……）！！」

俺、産まりました。

え？なんでネタに走っただって？

転生したから、言ってみただけだ！！

ひとまず現状把握。まず、転生した先は中世ヨーロッパのような世界だ。次に、家族は母には会ってるが、父とは会っていない。だが、死んではいないようだ。兄弟姉妹はいないようだ。家はそこまで貧しくないようだ。

そして、最後に自分について。名前はまだ無い。有るかもしれないが知らない。顔はランサーにしてくれると言っていたはずだが、人間以外にするとは言っていないかったはず……。

母は普通の人間だ。しかし、なぜ俺は耳が尖っている？

あれか、半エルフとか言うやつか？しかし、それ以前に俺はエルフか？

とりあえず思いついたのがエルフだが、ライカンスロープ（狼男）、ヴァンパイアなど、いろいろなものがある。それこそアニメやゲームなどに耳が尖っているキャラはいくらでもいるので数えだしたらきりが無い。

まあいい。ひとまず寝るか。

いいのかよ!!だって?この身体だと眠いんだよ。精神は16歳でも、身体は赤ん坊。というわけで、オヤスミ~~~~。

コンニチハ~~~~。

あれから数日、やっと名前がわかりました。《ジーク(sieg)》ドイツ語で勝利という意味だね。ファミリーネームはまだ知らない。

父とはまだ会っていない。あえない理由があるのだろうか？

まあ、今は寝る。オヤスミ~~~~。

とうとう母の名前を知りました。ついでに、ファミリーネームも。

母の名前は、アリア・フェミリス・マーシルン。当然ファミリーネームは、マーシルン。

俺は、マーシルンの名が出てくる作品は一つしか知らない。

「幻燐の姫將軍」

その主人公が、リウイ・マーシルンという半魔人のゲームだ。

アリア・フェミリンス・マーシルンはその母親だ。

ということは、俺は半魔人なのか！しかも、姫神フェミリンスの血も受け継いでいる！！

しかし、これからどうするべきだろうか？俺というイレギュラーがいる中でリウイは産まれてくるのだろうか？それとも、俺自身がリウイのかわりなのだろうか？

俺がリウイの立場とか嫌だな。

よし。まずは生き残ろうか。半魔人の俺は、必ず魔神病を発病するから村の人々から恐れられるだろう。リウイは魔神病を防ぐ魔法石を壊してしまったが、俺はそんなヘマはしない。

あれから3年。当然俺は3歳。

何事も問題なく、平和な暮らしをおくっています。

魔法石が有るから村の人々との関係は良好だ。

俺は、産まれて1年ちよいで言葉を話し始めたから、村の人からよ

く誉められる。

母も、「さすが、あの人と私の子ね」と誇っているようだ。

「ママァー、だぁーいすき」と言ったら、鼻血を勢いよく出して悶えていた。

大丈夫か、この親？

父とはまだ会っていない。母は何回か俺を隣の家に預けて、会っている様だが。

まあ、魔神で王だしな。忙しいんだろ

あと、俺に弟か妹ができました！！

たぶんリウイなのだろう。

しかし、俺というイレギュラーでどうなるのか分からない。

もしかしたら妹かもしれない。どちらでも嬉しいがな。

そういえば、俺の身体能力スゲーよ。

3歳だから身体はちゃんとできてないからかなんとかギリギリだが、バクテンできたぞ！！

3歳でバクテンって、ランサーってスゲーな。

あと、俺の目つきが悪いと言われます。

村中の子どもたちに泣かれましたorz

とりあえず、今は弟か妹が産まれてくるのを待ちますか。

でも、魔法石はどうすんの？一個しかないけど？

まあ、いいや。とりあえず、兵士さんの所にいつて槍を貸してもら
うように交渉しなきゃ

ランサーの技量を貰ったから、試してみないと。

そつえば、アサシンの技量は意味がないかもな。

まあ、貰っついて損はないしな。日本刀が欲しいな。西洋剣でも
できるかなあ？燕返し……………

一話（後書き）

感想おまちしております。

二話（前書き）

今回は、私の主観が混じっております。

あと、原作では、リウイは王都に住んでいましたが、この小説では村に住んでいます。

二話

4歳になってから、はや1ヶ月。とうとうリウイが産まれました。

やはり男の子で、名前は俺がつけました。

名前が違うとメンドいからな。

魔法石はまだ俺が持っています。赤ん坊の頃は発病しないらしいし、したとしてもなんとか誤魔化せるかららしいです。

そして、槍ですが貸してもらったのあきらめました。

え？何でかって？

危ないからと言って貸してくれませんでした。しかし、俺はあきらめなかった。あの事件までは……

2週間前・兵士駐在所にて

「槍を貸して下さい。」

俺は頭を下げていた。

「ダメだ。君には早すぎる。危険だ!!」

「大丈夫です。模擬戦用でもいいので貸して下さい!!」

「ダメだ!!」

チツ。こんなにも頭下げてんだろぅが。貸してくれてもいいじゃないか。それなら、

「それじゃあ、模擬戦をして下さい!!それで、危険じゃないと判断して下さい。もし、危険だと思ったら諦めます。」

(うゝむ。ここで危険だと思わせれば、この子は諦めるだろぅ。それに、寸止めでもすれば怪我の心配なく怖がせることができるだろぅ。よし、)

「いいだろぅ。しかし危険だと判断したら諦めろよ。」

「はい。(計画通り!!)」

模擬戦場

「おい、隊長怪我させんなよ」

「いつから隊長は子どもをいじめるようになったんだ?」

兵士達が野次馬として大量にいた。仕事しろよ。

「今回は木の棒を槍に模した物を使う。準備はいいな?」

「はい!!」

「ではヨイ、はじめっ!!」

俺は始まったと同時に、

「お前の心臓もらい受ける!! 刺し穿つ死棘の槍」
ゲイ・ボルグ

俺はそう言つと、槍を投げた。

「へ? (。・;)」

ビュンッ!!

槍はありえないスピード(約100km/h)で飛んでいった。

いやいや、確かに本気で投げたよ。でもありえないだろ!! (ちなみに、ランサーが投げるとマッハ2ぐらいでるらしい。)

槍は隊長の左胸に飛んでいき。

「ふごおっ……………」

バタリッ!!

たいちようをたおした!! けいけんちちをもらった!! テレテッテ
エッ!! レベルがあがった。

いやいや。ふざけてる場合じゃない。

シ~~~~ン

ヤバい。この空気耐えられない。というか誰か隊長を心配しろよ。

「えゝとつ、あのゝそのゝなんて言うか……………隊長が言ってたとおり、槍って危険ですね。諦めます。はははは……………は……………は……………」
「（^ー^;)」

（（おまえが危険だろつ））

その時、みんなの心が合わさった瞬間だった。

回想終了。

あの上は大変だった。兵士の皆さんは呆けているから俺が隊長を看病した後、ひたすら謝ったなあ。うん。みんな、武器は危険だよ。扱いには注意しようね

さて、筋トレでもしますか。

え？村の子どもと遊ばないのかって？いまだに俺の顔をみると泣くんだよorz

それに、俺にはリウイというかわいい弟がいるからね。寂しくなんか……………寂しくなんか……………寂しくなんかいないんだからね！！

あれ？口調がツンデレになってしまった。

っておいそこの母親よ。なぜ「ツンデレ萌え」などとつぶやいて
いる？

母よ。アナタも転生者か？

あれから5年。俺は9歳、リウイは5歳になった。

俺は、リウイが3歳の誕生日に魔法石を譲った。魔神病は気合いで
何とかした。どうにもならない時は家に引きこもって何とかごまか
した。

しかし、リウイは魔法石を壊してしまい、魔神病が村の人々に見ら
れてしまった。

それからというものはひどかった。村中から差別され、恐怖されて
みんなが俺たち家族をきちんと見てくれる人はいなくなった。

仲のよかった隣の家との関係も最悪なものになってしまった。

一番ショックを受けたのはリウイだろう。

今まで仲良くしてきた子ども達が、リウイを避けるか、イジメられ
るようになった。

子ども達の親が、イジメを止めたとしてもそれはリウイを恐れてい
るからだ。

リウイはいつも川のほとりで泣いている。

「リウイ、またここにいたのか。さあ、帰るぞ。」

「ジーク兄ちゃん……」

リウイは泣いていて、目のまわりは赤くなっていた。

「家で、母さんがご飯をつくって待っているぞ。ほら、泣くなって。」

「ねえ……ジーク兄ちゃん。」

リウイは蚊の鳴くような声で俺を呼んだ。

「なんだ？」

「どうして僕たちは、イジメられるのかな？」

「……………」

「僕が生まれてこなければよかったのかな？そうすれば、お母さんもジーク兄ちゃんもイジメられなかったのに。僕が産まれてこなければ……………」

「リウイ、産まれてこなければなんて言うな。俺と母さんもお前が産まれてきてくれて幸せだ。だから、絶対にそんなこと言うな。」

「でも……………」

「いいか、リウイ。この世界で産まれてきてはいけない生命なんじゃないんだ。どんなにその存在が人に迷惑をかけても、その存在には意味があるんだ。だからそんなこと言うな。お前にはまだ難しいかな？でもな、さっきも言ったが俺と母さんはお前が産まれてきてくれて幸せだ。」

「……………うん」

「よし、家まで競争だ！！」

「えゝ、ジーク兄ちゃんは足速いじゃん。」

「当たり前だ。お前より4年早く産まれたからな。」

「いや、そんなレベルじゃないよ。」

「よゝい、ドンー！！」

「うわあゝ、待ってよゝ。」

そうして俺達は家に向かって走り出した。
そしてその日の夜が運命の夜だった。

「「「ごちそうさまでした！！」」」

「お粗末様でした。」

「ヤッパリ、お母さんのご飯はおいしいね」

「ありがとう、リウイ。」

そんな会話をリウイと母さんがしていると、足音が聞こえた。

ドタドタ、ガチャガチャ。

音を聞く限り兵士の様だ。しかも重装備で、何十人もいるようだ。

「母さん……………王都が動いた。」

「そう……………お父さんのところに行くわ。すぐ準備して。」

「父さんの所？分かった。」

「????」

リウイは分かってないようだ。

「リウイ、今からお父さんのところに行くわよ。」

「今から？お父さんのところに？」

「ええ、そうよ。」

「母さん、早くー!!」

「さあ、リウイいくわよ。」

準備はできた。といっても持つて行くものは護身用の槍だけだが。

隠してあった裏口から俺たちは森に入っていく。後ろでは、家の中でタバタと俺たちを探しているようだ。

そして俺たちは、父さん 魔神グラザのところへ向かった。

二話（後書き）

感想おまちしております。

三話（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

三話

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

俺たちは今、森の中を走っている。

あの後、兵士たちはすぐに裏口を見つけて追いかけてきた。

俺はランサーの身体能力を持っているので、五感が優れている。だから、聴覚でいろいろと分かったりする。

「母さん、リウイ、大丈夫？」

俺は身体能力が高いから大丈夫だから問題ないが、母さんとリウイは体力がないのに、足場が悪い道を走っている。

「ええ、まだ大丈夫よ。」

「僕も大丈夫だよ。」

そう言っているが、二人ともキツそうだ。

だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

どうする？このままでは追いつかれてしまう。

相手は訓練している。重装備でもすぐに追いついてくるだろう。

ましてや、先回りをされたらもつと面倒だ。

父さんのところまでには追いつかれるだろう。

今も、考えてる間にしつかりと差が縮まってきている。

こうなったら仕方がない。

「母さん。俺が囷になる。」

「ダメよ！！そんなの絶対ダメ。」

「だけど、このままじゃすぐに追いつかれる。」

「それなら私が囷になるわ。」

「それだと、母さんが捕まったあとにすぐに俺たちも捕まってしまう。俺なら、この槍で足止めすることができる。」

「それでもダメよ！！ジークが危険じゃない。」

「大丈夫。俺は強い。母さんも知ってるだろ。兵士の隊長を俺は一撃で倒したんだ。だから、大丈夫だって。」

「……………じゃあこれだけ約束して。必ず戻ってくるって。」

「ああ、約束する」

「リウイ。俺は今から後ろから追ってくるやつを倒してくる。だから、その間母さんを守るんだぞ。」

「ジーク兄ちゃん、帰ってきてね？」

「ああ、約束だ。」

そう言う俺は身を翻して、走り出した。

ヤベエ、死亡フラグ立てちゃった（＾|＾；）

でも、母さんとリウイの為に兄ちゃんガンバるぞぉ。

ランサーの並外れた五感で兵士を確認する。

「えゝと、兵士が20人。そのうち、7人が弓兵か……」

パンッ！！

「よし、いっちょやりますか。」

そう言って頬を叩いた。

敵は、20人、無謀だがランサーならできるだろう。

なら、俺にだってできる筈。

敵との距離はすぐそこだ。

さてと、こつという時はカッコつけるか。

「我が名は、ジーク・マーシルン！！勝利を名に冠する者なり！！いざ、参る――！」

そう言つと、俺は敵にむかつて走りだした。

（弓兵が厄介だな）

俺はそう思いながら、兵士たちの横を通り過ぎ、一人の弓兵にむかつていった。

（まずは、一人。）

そして、喉を一突きした後すぐに方向転換し、次の弓兵へとむかった。

（ランサーと同じといっても、矢よけの加護があるとはいえ、戦い中によけれるほど戦い慣れはしていない。だから、先につぶす。）

槍で切り払い、喉を切つて二人目、三人目を同時に殺す。

（次――！）

俺は人殺しをしている。しかし、罪悪感はない。

それどころか、この戦いを楽しんでさえいる。

それが、魔神の血のせいなのか、ランサーのせいなのか、それとも元々俺自身に殺人願望があったのかは分からない。

だが、俺には今やるべきことがある。

母さんとリウイの逃げる時間を稼がなければならない。

「うらぁー!!」

弓兵を全員片づけた。

後は、13人!!

俺は、すばやく敵の懐にはいつて鎧の隙間に刺してすばやく逃げる。

よし、次!!

俺は、次の兵士の懐にはいった。が、

「ガッ!?!」

俺の隙をねらい、他の兵士が俺に攻撃してきた。

「くっ!!」

すぐに攻撃範囲からでる。

が、他の兵士が回り込む。

「っ！！チイツ。」

そこからも離脱する。

しかし、そこにも敵は回り込んでいる。

「クソがあっ！！」

一瞬の隙に敵の喉を突く。

「おらあ！！」

次の兵士も懐にはいり胴にある鎧の隙を突く。

だが

「しまった！！」

深く突きすぎた！！

人間の体は意外と丈夫で、あまり深く胴体部分を刺すと刃は抜けなくなることもある。

筋肉の収縮は思っているよりも強い。

「うがあっ！！」

そのできた隙に兵士が槍で突いてきた。

「くっ!!」

俺は、槍から手を放しすぐに離れた。

ズキンッ!!

「うぐっ」

が、傷が深かった様で倒れてしまった。

クソ!! 傷が深い。それに血も流しすぎた。
しかも目が霞んで見えにくくなってきやがった。

(もう、ダメか……………)

そんな言葉が頭をよぎる。

残り十人。満身創痍の俺では相手にできない。

まあ、いいか。母さんとリウイの逃げる時間は十分稼げた。

(母さん、リウイ、ゴメンな。約束は守れそうにないわ。)

警戒してるのか、じわじわとゆっくり敵兵が近づいてくる。

死ぬのは二回目か……………

……………。

イヤだ…

イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！
イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！
イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！
イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！イヤだ！！

俺はまだ、死にたくない！！

《ならば呼べ、その名を。》

誰を？

《叫べ、自分の魂を。》

魂？

《掴め、その手に。》

何を？

《生み出せ、自分だけの武器を。》

俺だけの………武器？

《己の信念のために！！》

そうか…お前が、俺の魂、俺の武器なのか………。

ならば呼ぼう。お前を………いや、ホントの俺自身を！！

「今こそ目覚めろ！！ Lance of Eclipse
ンス オブ イクリプス）」
（ラ

三話（後書き）

最後の槍を知ってる人いるかな？

某エロゲーにでてくる魔王（主人公）が使ってる槍なんだけどね。
ゲーム本編には一度も名前が出てきてない。

感想おまちしております。

四話

体の奥から力がわいてくる。

体の痛みも感じない。

俺の【魂】を持っていると、心が安らぐ。

【魂】は、禍々しく朱く染まった二叉の槍だった。

L a n c e o f E c l i p s e （ランス オブ イクリプス）

《失墜の槍》

それが俺の魂を具現化した【魂】、俺だけの武器だった。

いきなり俺の手に槍が現れて、敵兵は驚いているようだ。

だが、槍を持っただけと思い更に近づいてくる。

「C o d e : 魔を統べる王の槍（ランス オブ イクリプス）」

そう呟くと、体を紫色の魔力が覆う。

（俺は、生きる。そうリウイと約束したんだ。）

そして、敵兵が槍で突いてきた瞬間、俺は動きだした。

ドスッ！！

敵兵が俺を刺した。

が、それは残像。俺は残像を二体創り出した。一体は敵を突き、一体は敵をなぎはらう。

動きも、さつきとは比べ物にならない。

が、俺自身は今はキツイ。自分の体と残像二体を同時に動かしている為である。

そして、最後は敵の隊長だけになった。

「何だよコイツ。ガキのくせに強いじゃねえか。」

俺は、「魔を統べる王の槍（ランス オブ イクリプス）」を解除した。

「残念だったな。相手が悪かった。お詫びとして、いいものを見せてやろう。」

そう言うと、俺は槍を構えた。

「お前の心臓もらい受ける！！」

そう言うと俺は一気に、数十メートル後ろに飛んで下がり、駆け抜けた。

「突き穿つ死翔の槍ゲイ・ボルグ！！」

そして、俺は槍を投げた。

ズドドドドドツ!!

槍は纏った魔力で地面を削りながら勢いよく飛んでいき、

ズドーンッ!!

隊長にあつた瞬間、地面にクレーターを作った。

フラッ!!

あ、やべ。

ボタン!!

俺は倒れてしまった。

ああ、疲れた。でも約束を守らなくちゃ。

あれ? 約束って何だったけ? ...とても大事な...こと...だった気が
.....

そして、俺は意識を手放した。

??? side

血の二オイ？

しかも、大量の。

こんな森の中で、なんだ？

ズドンッ！！

っ！！

《なんじゃ？今のは？》

何だ？爆発？こつちだな。

俺が爆発のところに行くと子どもが倒れていた。

「おい、大丈夫か？」

子どもは、体中傷だらけで脇腹に大きな刺し傷があった。

《おい、お主これを見る。》

俺は、子供から視線をそらすとクレーターを見た。

《これは…スゴイのう。》

確かに。半径7メートルはあるだろう。

《この小僧がやったのかのう？》

「さあな。」

俺はそう言つと、子供を抱いて立ちあがった。

《おい！！お主、その小僧をどうするつもりだ？》

「連れて行く。」

《何でじゃ？》

「知らん。だが、そうしなければならぬと思った。」

《ハア~~~~。まあ、お主はよく分らんことをする。》

俺はその声を無視し、村へと歩きだした。

s i d e e n d

アリア s i d e

私たちは、あの人の所についた。

そこで、ジークが残つて時間を稼いでくれていることを告げるとすぐに探しに軍を出してくれた。

無事だといいけど……

軍が帰ってきた。

しかし、その中にジークはいなかった。

報告では、兵士の死体は見つかったが、ジークは見つからなかったらしい。後、その場には、半径7メートルのクレーターができていたという。

そして、ジークは死んだとされた。

（嘘よ！！）

私は信じられなかった。

（ジークは生きている。どこかの村で傷を癒しているんだわ。）

私は必死にそう思った。

「お母さん、ジーク兄ちゃんは？」

（そう、あの子はリウイと約束したじゃない。）

（あの子は、約束を破らないわ。）

「大丈夫よ。後、何日かしたら帰ってくるから。」

そっいつて私は、リウイを抱きしめた。

s i d e e n d

「どこだ、ここ？」

俺が起きると、知らない部屋のベッドにいた。

（俺、何してたんだっけ）

俺は、眠る前に何をしていたか思いだそうとするが、

（あれ？俺ってなにしてたっけ？）

俺は何も思い出せない

それ以前に俺は誰だ？

思いだそうとするが、何も思い出せない。

「約束、まもらなきゃ。」

え？約束って何だ？

何も、思い出せない！！

ガチャ

俺が悩んでいると、赤い髪の毛の人が入ってきた。

（キレイだなあ〜）

俺はそんなことを思った。

「起きたか。体は大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です。」

「そうか、ならいい。」

そんな返事が返ってきた。

そこで、会話は途切れてしまった。

シン……………

（うう、気まずい。）

そこで、その人が話しかけてきた

「セリカ。」

「え？」

「俺の名前だ。」

「名前？」

「そつだ、俺の名前はセリカだ。」

四話（後書き）

ハイシエラの口調が難しい。

感想おまちしております。

武器 技 用語（前書き）

最強にしないつもりだったのに、最強になってしまったorz

武器 技 用語

武器：Lance of Eclipse（ランス オブ イクリプス） 《失墜の槍》

ジークの魂が【魂】として具現化した物。朱く染まった槍で、先が二つにわかれた二叉槍。
元ネタは、「ティンクル くるせいだーす」の主人公「咲良シン」が使う槍。

技

・Code：刺し穿つ死棘の槍 ゲイ・ボルグ

主にFateのゲイ・ボルグと同じ。相手の心臓に刺さるという因果をつくりだす反則技。

・Code：突き穿つ死翔の槍 ゲイ・ボルグ

主に、Fateのゲイ・ボルグと同じ。魔力をまとわせて投げることにより敵をなぎはらう、大勢の敵には効果抜群。

・Code：燕返し

アサシンの技量によって修得した燕返し of 槍版。一度に一回の突きと、二回の斬をくりだす技。

・Code：魔を統べる王の槍（ランス オブ イクリプス）

魔力を体に纏うことにより、質量のある残像を作り出して攻撃する。イメージとしては、影分身。紫色の靄のような魔力を体中に纏う。創ったいくつもの残像を自分一人で動かすので、脳を酷使する。

・Code：闇を統べる天使の槍（ランス オブ イクリプス）

自分の身体能力を二倍、五感を最大まで強化し、魔術をうけつけない。しかし、二分が限界で、それ以上使うと体中の筋肉がズタズタに引き裂かれ、激しい頭痛が襲い、二週間は昏睡状態に陥る。

・Code：世界を還す救いと滅びの槍

リ・クリエ

ジーク最強の技。槍の先にリ・クリエの光を集め、衝撃波として打ち出す。最大で使うと、世界が滅びる。ジークが使うことはほぼ無い。

世界が滅びると言っても、リセットされるだけで、また新しい歴史をきざんでいくことになる。

・舗有無欄

「カッキーン、ホームラン」と言いながら、槍に魔力を纏わせ、柄で叩いてかつ飛ばす荒技。ジーク唯一の非殺傷の技。

・魔術

ジークは三種類の魔術を使える。念動系魔術、電撃系魔術、地脈系魔術の三つ。

用語

【魂】

自分自身の魂を具現化し、世界に物質として顕現した物。

一度自分の魂に触れなければならぬので、転生者にしか具現化できない。【魂】を解放すると世界と同化する。

リ・クリエ

世界自身が歪んだとされる世界を破壊し救済しようとする現象。破壊された世界はリセットされて、一から始まる。

転生者は歪みの一つとされる。

しかし、【魂】を解放した者は世界と同化するため歪みとは認識されなくなる。

武器 技 用語（後書き）

リ・クリエとか、もろにティンクル くるせいだーすですね。

っていうかティンクル くるせいだーすを知ってる人いるかな？去年にpspで出たけど。

五話（前書き）

「武器 技 用語」に技を追加しました

五話

「そこっ！！」

そう言つて俺は、ワームを槍で突き刺した。

「これで、最後！！」

そして俺は、ワームの群れをたおした。

《坊やは強くなったのう。》

「ああ。」

俺が振り返ると、一人の美人？な男性？がたっていた。

「いえいえ、セリカさんと比べたらまだまだですよ。」

《当たり前だのう。そんな簡単に強くなるのだったら苦勞はしないしのう。》

「確かにそうですね。」

ハイシエラ様がそう言ってきたので、肯定しておいた。

俺が、セリカさんと共に行動するようになって、二年がたった。

俺はいまだに記憶を取り戻していない。

あの後俺が倒れていたこと、周りの死体のこと、クレーターのことを質問されたが、俺は記憶喪失。何のことが分からなかった。

だから、自分が記憶喪失だということを告げた。唯一覚えているのが誰かと約束をしたことを告げると、セリカさんは少し悲しそうな顔をした。

そして俺は記憶を取り戻すためにセリカさんの旅についていくことになった。

そのとき分かったことだが、普通は聞こえないハイシェラ様の心話が聞こえることが分かった。

あと、余談だが、セリカさんが言うには俺は剣の使い方が変わっているらしい。

無意識で剣を振っていたので分からなかったが、確かに振りにくい。

使う剣がいけないと言われて、新しい剣を買いに行ったら目をひく物があった。

刀というもので、片刃の反った剣で試しに振ってみたらしっくりきた。

それから、俺はセリカさんと旅をしている。

この旅をしていて気づいたが、セリカさんは忘れやすく、どこか抜けていて、人と深い関わりを持つとしない。俺は特別らしい。

「これから、どうするんですか？」

俺は、隣を歩いているセリカさんに聞いた。

「これからか……………」

《それなら、坊やをひろった所にいつてはどうかの？》

「ふむ、そうするか。」

「なにも残ってないんじゃないですか？あれから二年ですよ？」

《何もなくても、近くの村はなくなるまい。》

「あ、なるほど。」

「じゃあ、いくか。」

そう言うと、セリカさんは歩き出した。

「わあゝ、待ってくださいよゝ。」

そついいながら、俺はセリカさんのあとを追った。

「セリカさん。」

「何だ？」

「この状況、何ですか。」

《モテモテだのう。》

あれから、森を歩いてるうちに迷宮を発見した。

丁度、迷宮内に湖があり日も暮れそうだったので此处で野宿しようということになったのだが、

「モテモテって、これはちょっと……」

俺たちは、水精の群れに囲まれていた。

中にはウンディーネやレニア・ヌイがいる。

見たところ、軽く五十は超える。

《で、どうするのだ？》

「どうするも、倒さなければ逃げることもできまい。」

「この数をですか!？」

《それならば、さっさと終わらせい》

「ああ。」

そう言つとセリカさんは、群れに突っ込んでいつてしまった。

「ちょ、マジッスか?ああ、もうコンチクショー!!」

そう言つて俺も群れに突っ込んでいった。

「ゼエ〜ゼエ〜ゼエ〜」

《軟弱いのう。見ろ、セリカは平気のようだが？》

「普通…は…疲れ…ますよ……」

マジで疲れた。つていうかセリカさん、何で平気なんですか？ホントに人間か？

「疲れたのなら、早く休め。」

「……………は、はい。」

汗かいたな〜。そうだ！！丁度ここに湖があるから水浴びしよう。

久しぶりだな〜。この水は冷たくて気持ちよさそうだな〜。

こうして、夜は過ぎていく。

今日は、迷宮の近くにある村にきた。

迷宮を探索しようとしたが、広そうだったので断念。

そこで、予定ど通りに近くの村にきたのだ。

（俺は、ここを知っている？）

俺はこの村の景色に見覚えがあった。

《どうじゃ？なにか思い出したか？》

「いいえ。ですが、この村は懐かしい感じがします。」

「そうか。なら、村人にでも聞いてみればいいだろう。」

「……………そうですね。」

その時、歩いていた村人が俺を見て言った。

「ジーク・マーシルン！！」

俺はその名に覚えがあった。

（俺の…名前？）

もっといろいろと聞こうとすると、

「何で帰ってきた？呪われた子め！！」

「え？」

その怒声に他の村人たちがやってきた。

「そうだ！！どうして帰ってきた？」

「半魔人め！！俺たちを殺しにきたのか？」

「あの…ちょっと………」

「お前なんて消えてしまえ！！」

誰かが石を投げてきた。

それをキツカケに、村人たちは俺に向かって石を投げ始めた。

「くっ……」

俺は村人たちから逃げる為に走り出した。

そして、ある焼けた家を見つけた。

（この家を知っている。ちがう、この家に住んでいた？）

ズキンッ！！

「ウグッ！！」

頭痛と共に記憶が頭に流れてくる。

自分が半魔人だということ、母さんのこと、リウイのこと、そして……約束のこと。

「ああ、そうか。俺の名前はジークか。」

「大丈夫か？」

「セリカさん……」

セリカさんが、話しかけてきた。

「ええ、大丈夫です。あと、記憶を取り戻しました。」

「そうか。」

《なら、坊やの名前はなんなのさ？さっきの村人がいつていたが……》

「ああ、俺の名前はジーク・マーシルンだ。」

「ここで、何があつた？」

「……………」

「つらいなら言わなくてもいいが？」

「いいえ、言います。知っておいてもらいたいのです。」

そう言つと俺は話し始めた。

「俺は、人間の母と、魔人の父の息子で半魔人です。他に弟が一人いました。」

「父とは離れて住んでいました。この村の村人たちとの関係は良好で、何不自由なく暮らしていました。」

「ある日、弟の魔神病を村人に見られてしまったのです。」

《魔神病、確か半魔人が発病する病気だったのう。》

「はい。そして村中にある噂が流れ出したんです。魔神病にかかったら、人を食べると。」

「あとは、村人たちに怖れられて、村から追い出されました。」

《ひどい話だのう。》

「ああ。」

《これから、どうするのだ？》

「前に言っていた約束。あれは、弟と交わしたもので、生きて帰るというものです。」

「だから、母さんと弟を捜します。」

「そうか。」

「ええ、これからは一人で旅します。」

《寂しくなるのう。此奴と二人つきりだと、会話が續かん。》

「ハハハ、確かにそうですね。」

「前に戻るだけだろう。」

《それでも、会話相手がほしいのじゃがのう。》

そう言つて、ハイシエラ様はため息をついた。

「セリカさん、ハイシエラ様。今までありがとございました。では、またいつか。」

「ああ。」

《うむ、またいつかだのう》

「そうだ、セリカさん。次に会うときまで、俺のこと覚えておいて下さいね。」

俺がそういうと、

「ああ、一応頑張ろう。」

《一応なのか……………》

そして俺たちは、分かれた。

さて、これからどうしようか？

なぜか、大国カルツシャ王国に行った方がいい気がする。

なぜだ？まあいい。行き先はカルツシャにするか。

何かがある。絶対に。

そして俺は、カルツシャ王国に足に向けた。

カルツシャ王国についた。

今は夜だ。

俺は半魔人だから、フードをかぶって耳を隠してる。

逆に目立ってるが仕方がない。

（何かに呼ばれてる？）

何かに呼ばれている感覚がする。なんか、こっ、同じ存在？のよう
な、ひかれあうような感覚。

それが、城の中から三つ。一つは強くて、後二つは、弱い。

「あの部屋か……。」

そのうち、弱い感覚の一つがベランダつきの部屋からする。

「よっ、ほっ、てめ、」

そう言って俺は城壁をベランダまで登りきった。ジャンプして。

「ふうう、案外できるんだな三段階空中ジャンプ」

空中に、念動系魔術を使って、足場を作っただけだが。

ギイイイイ

「誰!？」

俺がベランダの窓をあけると、金髪の少女がいた。

「あんたか？俺を呼んだのは？」

「え？」

その少女は呆けてしまった。

「あの、呼んだって？私は誰も呼んでませんよ。」

少女からは、あの感覚がする。

「ああ、呼んだって言うても口に出していった訳じゃなくて、感覚

だから。」

「えっと？ところでアナタは？」

「ああ、そうだったな。俺の名前はジーク。ジーク・マーシルンだ。」

俺は、そう言ってフードをとった。

「ッ！！魔族？」

「ああ、半魔人だ。母親が人間だ。」

「半魔人！？私をどうするつもりですか？」

「ん？別になにもしないぞ。」

「は？」

「しいて言うなら、会話相手になってくれ。」

「会話相手？」

「そう、最近は独りで旅してるしな。」

「冒険者なんですか？」

「いや、二年前に分かれた母と弟を探しにね。」

「そうなんですか……ごめんなさい。」

「きにすんな。ところで君の名前は。」

「え？」

「だから、君の名前は？まだ聞いてないよ？」

「私の名前は、セリーヌ・テシユオスです。」

「そうか。セリーヌか。いい名前だねえ。可愛い君にはピッタリの名前だね。」

「可愛いって／＼／」

「じゃあさ、セリーヌ。俺の話につきあってよ。」

そして俺たちは、話はじめた。

「クスクス。ジークさんの話っておもしろいですね。」

「そうかな？でも楽しんでもらえてうれしいよ。それに、セリーヌの笑顔は可愛いから、こちらとしてもありがたいし。」

「そんな、可愛いだなんて／＼／」

そう言うと、セリーヌは顔を紅めてしまった。

なぜだ？

俺がそんなことを考えていると、

ゾクッ！！

（殺気？あと、あの感覚？）

殺気とセリーヌより強いあの感覚がこっちに迫ってきた。

バンッ！！

そして扉が強く開けられた。

と同時に接続剣が俺にむかって振り下ろされた。

「セリーヌ。無事か？」

「エクリア姉さま！？」

入ってきたのは、仮面をつけた女だった。

「危ないな。接続剣だなんて軌道が見にくいから、はじくのも精一派なんだよ？」

「ふんっ、それをはじいたクセになにを言う。魔族？」

「あ、あのエクリア姉さま。これは、」

「エクリアとか言ってたか、」

「名前でよぶな魔族。」

「……………少し表でろや。」

「なぜ私が魔族の言うことを聞かなければならない。」

「……………セリーヌがいるから外でやろっか？」

「ふむ、それもそうだな。」

そう聞くと同時に、俺はベランダから飛び出した。

そのあとをエクリアが追ってくる。

俺は庭園の様なところで立ち止まった。

「一つ聞きたい。あんたとセリーヌから、同じ呼ばれるような感覚がする。なぜだ？」

「ふん、訳のわからぬことを。」

そう言ってエクリアは連接剣を振りかぶってきた。

「うおっ！？」

俺はそれを刀ではじく。

「イオ＝ルーン」

ちよっ！？純粹系魔術かい。

「くっ。」

避けようとするが直撃。

「おらぁー!!」

俺は、ハイシエラ様から習った地脈系魔術で地割れをはなった。が、回避される。

で、また連接剣を振り下ろしてくる。

「ちい」

はじいて瞬時に懐に入る。

「くらえっ!!」

刀を水平にして切る。

「くっ」

が、避けられて掠っただけにとどまる。

「ならばー!!」

すかさず俺は、電撃系魔術で落雷を発動させる。

これは、直撃したようだ。だが効いてないようだ。

「イオールーン」

また、魔術を発動される。

それを回避したあと、すぐに念動系魔術で石つぶては発動させて応戦する。

（コイツ、強い！！）

俺が持てる全ての魔術と力を使っても、圧倒されている。

セリカさん程では無いにしても、十分強い。

魔術と連接剣の連撃が強い。俺に休ませる隙を許さない。

（このままじゃあ、いつかやられる。）

俺は、そう思った。

「ならば、」

俺はそう言つと、刀を鞘に収めた。

「？」

エクリアは困惑しているようだが、チャンスと思い連接剣を振り上げた。

俺は、左足を下げて腰を落とし、左手は鞘に、右手は柄を握る。それは抜刀の構え。

連接剣が振り下ろされた。

「ハアアアアアアアアアアッ!!」

そして俺は刀を振り抜き、

ガキンッ!!

「なっ!?!」

連接剣を斬った。

エクリアの顔は驚愕に満ちていた。

が、それも一瞬。

「イオールン」

俺の抜刀後の隙に魔術を使用した。

「グアッ!!」

魔術は、隙だらけの俺にクリーンヒットした。

「ガハッ」

俺はその場に倒れてしまった。

「剣を斬るとはな、思いもなかった。」

「だが、これで終わりだ。」

確かに。俺の体ボロボロだし、動くことさえできない。

（あゝあ、俺はまた（・・・）死ぬのか。）

まて、まただと？何で俺はそんなこと考えた？

俺は一度、死んでいるのか？

《思い出せ》

何だ？

《呼べ》

誰を？

《取り戻せ》

何を？

《本当の自分を》

本当の……俺？

《己の魂を》

ああ、そつか。俺は、本当の俺は転生者なのか…………。

記憶喪失だなんてな。

ていうか、セリカと会ってるし。ましてや、エクリアとセリーヌにも会ってるし。

成る程、俺はフェミリンスの血に惹かれてたんだな。

同じ血を持っているからか…………

「って、ヤバッ!!」

エクリアが俺の刀を振り下ろしてきた。

俺はそれを避ける。

「ほう、まだ動けたか。」

「ああ、なくし物を見つけたんで呆けてた。って言うか俺の刀返せ!!」

「普通、敵に武器を与えるか？」

「ああ、そうだな。別にいいか。」

「何？」

「来い、Lance of Eclipse（ランスオブイクリプス）」

俺は、【魂】を喚びだした。

「何だと！？」

エクリアの顔は驚愕に満ちていた。

ま、当たり前だな。いきなり槍が現れるんだから。

「さて、『殺戮の魔女』よ。」

エクリアの顔がまた驚愕に満ちる。

「お前の力見せてもらうぞ。」

そして俺はエクリアに接近し、槍で突く。

「くっ！？」

エクリアは刀で防ぐが、すぐに俺が槍で突く。

「ぐっ！！」

太もみに軽く刺したあと、俺は一旦距離をとる。

「くっ、イオールーン」

エクリアはすぐさま魔術を発動する。

「なめるなっ!!」

俺は槍に魔力を纏わせイオールーンを相殺させる。

「なっ!？」

俺はエクリアに近づき、

「カッキーン、ホームラン!!」

槍の柄で腹を思いっきり叩いて、エクリアを吹っ飛ばした。

「グハッ!!」

エクリアは、転がっていった。

魔力を纏った槍で叩いたんだ。暫くは動けないだろう。

「殺すなら、早く殺せ。」

「いや、殺さねーよ?」

「何?情けをかける気か?」

「いや、殺したらセリーヌにフェミリンスの呪いが受け継がれるかもしれないし、それにセリーヌが悲しい思いをする。」

「お前、ほんとに魔族か？」

「さあな。」

そう言いながら俺は、エクリアに治癒の水をぶっかけた。

「冷たっ！！なにをする？」

「うるせー。刀は返してもらうぞ。」

そう言って俺は、刀を鞘にしまった。

「さてと、どうしようか？」

俺たちは庭園の様なところ戦っていた。するとなんということでしょう。兵士がわらわらとわいてくるではありませんか。

「まずは、」

そう言って俺は、空中ジャンプをしてセリーヌの部屋のベランダに跳んだ。マ○オも真っ青だ。

「っ！！ジークさん、エクリア姉さまは？」

「大丈夫。下で倒れてるよ。一日中寝とけば元気になるよ。」

「ごめんなさい。迷惑をかけてしまって。」

「こちらこそ謝りたいよ。夜中に勝手に部屋にはいったしね。」

「それに、俺が魔族だし。」

「あの…それは……………」

「姫神フェミリンスの呪い」

「っ!!」

「仕方ないよ。血の呪いには勝てない。」

「何で知っているのですか？」

「同じだから、かな？」

「え？」

「さてと、俺はもういくね。あ、そうだ。」

俺は【魂】で指輪を創った。

「これ、あげる。」

「え？あの…これって／＼／」

「その指輪、呪いと病気を軽くする効果ついてるから。」

「え、あの…」

「じゃあね〜」

俺はそう言っ、部屋から飛び出した。

うゝん、濃い二年だった。

セリカに拾われ、セリーヌの部屋に忍び込み、エクリアと戦いをした。

「さてと、迷宮にいくか。母さんとリウイはちゃんと逃げきったかね？」

そう思いながら歩いていると、目の前の空間が歪みだした。

「！！」

なんだ？何が起こっている？

そして、そこから女の人が見えた。

大量の魔力、目を隠しているアイマスク、口を塞いでいるボールギヤグ、お付きのムキムキのおっさん（土台）、でかいスピーカー。

どこからどう見ても、姫狩りダンジョンマイスターに出てくる漂着した異界の姫です。

知り合い達の中では、M姫と呼ばれていた最強のユニットにして我らがアイドル。

やべえ、欲しい。この子が欲しいよ。

「ヴアアアアアア」

つて、アウエラの裁き！？

「ヤバッ」

ズドンッ！！

確か、姫狩りだと捕獲せずに倒せば良かったんだよな。ならば、

「カッキー、ホームラン」

エクリアに使った技、舗有無欄をはなつた。

そんでもって、クリーンヒット。そんで気絶。

よし契約するか。

「我がジーク・マーシルンの名の元に跪け。」

そんな言いながら、魔力を流して契約する。

適当にやったけど、できたっばい。

それにしても、まおーさまはこのおっさん（土台）はどうしていいんだろうか？

あれ？歪みの中に帰っていった。

って、歪み大きくなってね？

「ちょ、おま……」

そう言って俺は歪みの中に消えた。

「……の……い……で……か？」

ん、誰だ？

「あの……い……じょ……ですか？」

何だよ、聞こえねえよ。

「あの、大丈夫ですか？」

「んあ？」

俺が目を開けると、

「良かった。無事で。」

「へ？」

小さいまおーさまがいた。

なんで？

五話（後書き）

なんとなくエミリオ登場

これから「エミリオ育成計画」でもやろっかな？

感想お待ちしております。

六話（前書き）

オリキャラ登場！！

六話

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「ビックリしましたよ。空から降ってくるなんて。」

「そうなのか。ところで君は？」

「あ、僕の名前はエミリオです。」

「そうか……、俺の名前はジークだ。驚かせてすまなかったな。」

「いえいえ、それよりも体大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「でも、何で空から？」

「歩いていたら、気絶してきずいたらここで倒れてた。」

「そうなんですか。不思議ですね。」

「そうだな。不思議だな。」

どうも、ジークだ。只今俺の目にまおーさまがいる。

魔力は感じないから、まおーさまになる前のエミリオかな？

おっ！！いいこと考えた。今からエミリオを強くすれば、まおーさまの苦勞が無くなる。まおーさまは不憫すぎる。

よし、俺はエミリオを強くする。

そのために、

「エミリオっ！！」

「はいっ！？」

「お前の家に住ませてくれ。」

「へ？家に？」

「ああ、俺はこの国の者じゃないからな。だから、たのむっ！！」

「いいですよ。」

「ホントか！？ありがと。」

「いえいえ、家に行く前に、仕事終わらせないと。」

「仕事？もしかして、この庭園はお前が作ったの？」

「ええ、そうです。」

「すこな、こんなキレイな庭園初めて見たぞ。」

カルツシャ王国の庭園よりすごい。

「よい、っしょ」

エミリオは重そうに土の入った袋を運んでいる。

「ほら、持ってやるよ。」

「あつ、ありがとうございます。」

「よつと、思つたより重いな。」

「僕、小さくて力も無いからいつも大変で。」

「なら、俺がお前を鍛えてやるつか？」

「え？鍛える？」

「そうだ。力をつけるだけじゃなく、戦い方も教えてやる。自分の身は、自分で護る。自分の身を護れない奴は、他の人を護れない。」

「えーと、じゃあお願いします。」

「よし、明日から暇な時間にトレーニングするぞ。」

「はい。」

「よし、なら早く仕事を終わらせよう。………腹へった。」

「わかりました。」

そして、俺たちは仕事を始めた。

転移後・三年

「よし、今日は迷宮にいくか。」

「ええ！！迷宮って魔王の？」

「ああ、そうだ。」

「ムリムリムリ、そんなところ行けないよ」

「大丈夫。お前は強い！！」

そう、エミリオは強い。予想外の強さだ。

エミリオは手数で勝負してくる。

その身軽な体で素早く近づき、両手に持った双剣で斬ってくる。

エミリオは、モンオンか！？と俺につっこませる程に乱舞してた。

しかも、俺は双剣は専門外なので、エミリオが自分で創った型でだ。

最近、その手数で俺に食いついてきている。

あと、魔術が使えるようになった。

俺が教えたら最初はできなかったが、できるようになった。

しかし、エミリオ自身の魔力の量が少ない。なので、あまり使わない。

まあーさまになったら魔力がわんさかもてるだろう。ちなみに電撃系魔術を使う。

「それに、魔王のところに行くだけだから。」

「そっか、なら安心して……………つてするか……………!!」

おお、ノリツコミ。

「何で魔王のところに行くんですか？」

「えーと、俺は半魔人だから挨拶にでも…と思った。」

うん、挨拶は大切だよ。

「はあ……、わかりましたよ。断っても無理やりつれてくんではようっ?」

「当たり前だ。」

「少し待っててくださいます。すぐに用意してきます。」

そういつて、エミリオは家に走っていった。

迷宮内では何が起こるかわからないからな。

「来い。アイリス。」

そう言うつと空間に歪みができ、中から漂着した異界の姫が出てきた。

しかし、アイマスクとボールギャグが外れていた。

「はい、主。」

漂着した異界の姫は、俺と契約したせいか正気を取り戻し、言葉を話せるようになった。

名前をアイリスと名付けた。

「今から迷宮に入る。エミリオを援護しろ。」

「了解しました。」

「お待ちせしました。」

俺が命令していたら、エミリオが装備を整えてやってきた。

「うし、じゃあいくか。」

「はい!」

そして、俺たちは迷宮へと入っていった。

俺たちが迷宮に入ってからだいぶ経った。時、

ズドンッ!!

「な、なにっ?」

「爆発のようだな。場所は…近いな。」

「どうします?」

「楽しそうだな。行くぞ!!」

「やっぱりそうですか。はあ、そんなんだから、顔が恐いんですよ。」

「エミリオが俺をいじめる」

「よしよし、私はいつまでも主の味方ですからね。」

アイリスよ。君は最高だよ。

「逝くならばさっさと逝ってください。」

「ちょ、エミリオ!?!字が違っぞっ!!」

「忌のせいです。」

「それも違うよ！？何か俺に怨みでもあるの？」

「怨みなんてあるわけ無いじゃないですか。」

「エミリオ。お前……………」

「あるのは侮辱です。」

「チクシヨーーーーーッ！！！！」

「どうしてだ！？どうしてお前はそんな風になってしまった？」

「これが、ジークさんの教育の賜物です」

「俺はそんな風に育てた覚えはないぞ！！」

「育ててほしくない人NO・1ですよ。」

「ひどくね！？」

「戦闘しか能がない人ですから。」

「ぐはっ！！」

「主、そろそろ行った方がいい気がします。」

「あ、ああ。そうだな。」

そうして俺たちは、爆発があつたであろう方向へと向かった。

「なっ！！これは！？」

「すごいですね。」

そこには、魔族の遺体が大量にあった。

「ヒドいな。」

ガキンツ！！

「何だ？」

「戦闘の様ですね。」

「行くぞ！！」

俺たちが走っていくと、そこには少数の人間族と大量の魔族が戦っていた。

が、魔族の方が劣勢の様だ。

「あの人間たちは？」

「勇者の様ですね。姫様もいるみたいですし。」

確かにシルフィーヌの姿もある。

これが勇者一行か。

正直言つて、弱いな。

勇者とエミリオでは、エミリオの方が強い。

勇者一行という集団で動くことによって、その弱さを補っている。

一行でやつとエミリオを倒せるんじゃないか？

そして大量の魔族が攻めてきているこの時に個人の力がわかる。

勇者は、自分の勇者としての能力に頼っている。

それに比べ、エミリオはこれといった能力もなく、魔術も使えんとは言えないため、自分で磨いた技量が頼りだ。

ましてや、相手が俺という絶望的な模擬戦をしてきたのだ。経験などいくらでも積める。

魔王とタイマンを張れるだろう。勝てるかどうかは知らないが。

「エミリオ。お前は隠れてろ。姫様に見られたらヤバいだろ？」

「わかりました。」

「では、行ってくる。」

「逝ってらっしゃい。」

おい、お前は……………

まあ、いい。さてと、助けに行きますか。

と知っているうちに、シルフィーンの後ろで、リザードモールが槍を振りかぶった。

「ヤバッ、間に合え!!」

俺は、走ってシルフィーンを片手で抱き抱えんと。もう片方の手で【魂】をだして、槍を受け止める。

「えっ!？」

「大丈夫かい？可愛いお嬢さん。」

「え…あ、はい、大丈夫です……／＼／」

「さてと、可愛い娘に傷をつけようとした罰だ。」

そう言うと、俺はリザードモールを刺し、飛び上がって安全な場所へと下がった。

「あ、あの……………ありがとうございました。」

「いいよ、気にしなくて。こんな可愛い娘を助けるなんて当たり前だよ。」

「可愛いだなんて……／＼」

そうこうしているうちに、勇者一行は魔族を片付けてこちらに歩いてきた。

「大丈夫かい？シルフィーヌ。」

「あ、勇者様。この方が助けてくれました。」

「なっ、魔族!？」

「え？」

どうやらシルフィーヌは俺が魔族だと気づかなかつたらしい。

「何で助けた？魔族のクセに。」

「人を助けて何が悪い？お前は人助けはしないのか？ゆ・う・しゃ・さ・ま。」

皮肉を込めて言う。

「俺は、何で魔族なのに人間を助けるのか聞いているんだ。」

「人間だから、魔族だからという見方はやめた方がいいぞ。それに人間と闇夜の眷属が共に暮らす国を俺は知っている。」

勇者は何も言わない。何か考えている様だ。

「こちらにも忙しいんでね。お暇させていただくよ。じゃあね、お嬢さん。気をつけてね。」

そう言っただけ俺は立ち去った。

シルフィー又side

さっきの人、格好良かったなあ。

助けてくれたし、それに私のことを、か…可愛いつて言ってくれるし／／／

しかも、魔族だったのに人間と魔族を差別しないし。

格好良かったな

そういえば、名前を聞いていなかった。

なんて言っただろう？

また会えたらいいな。

side end

「こちら、スネーク。大佐、目標への潜入に成功した。」

「何やってるんですか？とうとう頭が逝っちゃいました？」

俺たちは今、魔王がいる階にきていた。

あまり魔族と会わないよう移動していた。気分はMGS。C・Q・Cが使えたらな。

「これは、潜入ミッションだ。余分な戦いは極力避けるんだ。」

「メンドクさい。敵なんて全て蹴散らせばいいんですよ。それに、戦いなくて何が楽しいんですか？」

ヤバイ。エミリオが戦闘狂になってしまった。

そして俺たちは、デカイ扉の前にきていた。

ギイイイ

「邪魔するで〜」

「邪魔するなら帰ってや〜。」

「あいさ〜」

って、魔王よ。なぜ吉本のネタを知っている？お前も転生者か？

「冗談はここまでにして、はじめまして魔王よ。」

「何者だ？」

「ジークだ。そして、これが奴隷のエミリオとアイリスだ。」

「誰が奴隷だ。誰が嬉しいか？」

「あそこに。」

「私は主、ジーク様の肉〇隷で幸せです。／＼／」

「で、何のようだ？半魔人と人間ごときが。」

コイツ、俺が半魔人だと見抜いたのか。

「一つ、忠告をと思って。」

「忠告だと？」

「ああ。今、勇者がこちらにきている。」

「ああ、知っている。そのために、軍を出している。」

「ええ、アナタの軍は強いです。それにアナタも。」

そう、魔王は強い。エミリオはタイマン張れる、と思っていたが会ってみると強い。

俺に本気を出させることができる、少数の一人だろう。

「しかし、相手は一人ではない。それに、勇者の能力とあなたは相性が悪い。」

「それで？」

「アナタは、このままでは消されるでしょう。」

「ほう、この私が負けると？」

「そこで、提案だ。アナタがもし負けたら、復活するとても適当なことを言え。そうすればこの国はアナタを封印するだろう。封印される最適な姫がいるしな。」

「封印されたら意味がないだろう。」

「封印された後、使い魔にでも命令させて新しい体を手に入れる。そして元の体に戻ればいい。まあ、人間に負けたらな。」

「ふむ、人間に負けるようなことはないと思うが、忠告感謝する。」

「俺は、アナタに消えてほしくないだけだ。では、これで。」

「ああ、さらばだ盟友よ。」

「半魔人ごときが盟友か？」

「フハハハハハハハ、半魔人ごとき（・・・）だと？貴様、強いだろう。」

魔王が笑ってきた。

「すごいな。力を押さえていたはずだが？」

「かすかだが、魔力が洩れていたぞ。」

「その魔力を感じることができることがすごいな。ふむ、そうだな。じゃあな、盟友。」

「ああ、またいつか。」

そして俺たちは、迷宮を後にした。

魔王が封印された。

原作通りにシルフィーヌが封印したらしい。

そして、俺たちは迷宮を探索していたら、何かの人工的な部屋の様な場所を見つけた。

そして俺たちは、そこを調べることにした。

「スゴく神秘的な場所ですね。」

「神殿では無いようだが、何かの儀式をする場所か？」

「何か、魔術的な物も感じます。」

「確かに、これは……封印？この部屋全体にかかっているな。」

そして、俺たちは開けた場所にでた。

「ほう、こんな所に来るとは何の用だ？」

「っ！！」

声の方を向くと、男がいた。

黒い髪に、伸びた顎髭、騎士の様な鎧を着ており、ボロボロだが豪華なマントを羽織っており、目は白目の部分が毒されたように紫色に染まり、黒目は紅く輝いていた。左目の下から首まで刺青の様に文字が描かれていた。すごい量の魔力を有しているらしく、包み隠さず堂々としていた。

何より目を引いたのは、左側の額のみから伸びた角だった。

そしてその男は、威圧感を発していた。それはまさしく『王』といったかんじだった。

「お前は一体、何者だ？」

「我か？我の名はヴェナードだ。見ての通りしがないただの騎士だ。」

六話（後書き）

ジークが12歳現在の強さを比べると、

ジーク セリカ>エクリア>魔王>>>エミリオ>アイリス>>>
勇者>>>リウイ

てな感じですね。ジークが本気でしたらですけどね。ちなみに、セリカとエクリアはゲイ・ボルグの因果の逆転は効きません。俺的ですけどね。

新キャラのヴェナードは強いです。そして、あのキャラとそんな関係があつた！？てな感じです。

この2月一杯は更新できるか分かりません。ご了承ください。

感想お待ちしております。

七話（前書き）

遅くなつてすみません。

戦女神シリーズをやり直そうと思ってやった方がいいが、ぜんぜん進まないorz

神採りの体験版やったり、近くのゲーセンでLOVを見つけたのでやり始めたり。

忙しい……………

七話

「しがない騎士？そんな威圧感を放っておいて何を言う？アンタがしがない騎士ならば、他の奴らはクズだな。」

「ハハハハハハハ、ならば我は何だというのだ？」

「騎士王」

俺は即答した。

「ふ、騎士王か………我は王の器ではない。」

ヴェナードは自嘲気味に応えてきた。

「さてと、なぜお前はこの部屋にいる？この部屋は一体何だ？」

「この部屋は封印の間だ。この部屋中に封印がかけられている。そして我はここに封印されているというわけだ」

「これが封印？こんなんじゃ力を封じることもしかないぞ。体がダルくなるぐらい？」

「仕方あるまい。魔術師が雑魚どもしかいなつかたのでな。」

「じゃあ、なぜお前はこんな所にいる？こんな所はすぐに出てけばいいのに。」

「我なりのケジメでな。」

「そうか。それと……アンタは魔族か？」

そう、ヴェナードは魔族の感覚がしない。いや、確かにするにはする。だが何かおかしい。人間の感覚もある。だが、半魔人でもない。

「さあな。この身はまだ（・・・）人間なのか、魔族なのか、それとも別の何かか。我もわからん。」

「まだ？ということはお前は人間だったのか？」

「ああ、人間だった。」

「じゃあ、どうしてそんな姿に？」

「知りたければ我と戦え！！貴様が勝ったら教えてやる。」

………は？

「いやいや、なぜに？」

「ここでは一人つきりでな、娯楽が無いのでつまらないのだよ。」

「だからってなぜ戦う？」

「貴様が強そうだからな。楽しめるだろう。」

ええ、コイツ戦闘狂かよ！！

「では、ゆくぞー！！」

「ちょ、まて!!」

俺は、瞬時に槍を具現化させヴェナードの両手剣の斬撃を防いだ。

「おい!!あぶねえな!!」

「本気でこい!!」

「人の話を聞けー!!」

ヴェナードは、上段斬りをしてくる。俺は冷静にそれを逸らす様に防ぎ突くが、ヴェナードは避けて横斬りをしてくる。それを同じ様に逸らし、なぎはらう。ヴェナードはそれを両手剣の腹で受け止める。

「やはり強いな。」

「アンタもな!!」

「ふむ、ならば少し本気を出すか。」

ヴェナードはそう言うのと斬りかかってきた。オレはそれを避けて突くが、

「ッ!!」

ヴェナードは突きを剣で弾き、無防備になったオレに横斬りをする。

「クソッ!!」

オレは咄嗟に後ろに下がって避ける。すぐさまオレは、突くが避けられる。

そしてすぐに反撃される

オレはそれを避けて反撃する。

避けては反撃を何回もくり返していく。

それを何回かくり返した後オレは離れて、姿勢を低くして突っ込む。

そして槍の先で切り上げる。

が、それも防がれる。

それでもオレは一回、二回と諦めずに突く。

が、やはり避けられる。

「これで終わりにしてやろう。我が奥義の一つを喰らうがいい!!」

そう言いヴェナードは剣を前に突き出すように構え、

「フンッ!!」

突っ込んできたかと思えば斬りつけてきた。

普通の斬撃なら避けれただろう。普通（・・・）なら。

「なっ!？」

七つの斬撃が同時に繰り出された。全くの同時に。

それをオレは捌くが、七つの斬撃を同時に相手することができずに、左腕に三つの斬撃を喰らってしまった。

確かに今、剣が七本あった。これは

「多重次元屈折現象（キシユアゼルレツチ）」

多重次元屈折現象、型月の世界で出てくる現象で、別の平行世界から自分の世界に物呼び出す現象だ。

キシユア・ゼルレツチやアサシンが使ってた。

「本気だったのだな。やはり強いな。」

「そりゃどうも。」

左腕は幸いにも傷が浅い。戦闘に支障なさそうだ。

「少し本気を出すと言ったな。」

「ああ。言ったな。」

「全力で来いよ。相手してやる。」

「ほう、ならば全力でいこうか。」

ヴェナードの威圧感が何倍にも跳ね上がった。

「我が最強の一撃うけてみよ!!」

そう言うとヴェナードは剣を上構え、

「罰せられし騎士の剣」
パニッシャー

勢いよく振り下ろすと同時に剣から赤黒い光の斬撃が放たれた。

「っ!!君臨すべし神々の涙」
レイニングティアーズ

半透明の水色の膜がオレを包む。これは傷を治し、バリアにもなる優れものだ。

しかし、バリア自体はそこまで頑丈じゃない。ランクがDの魔術以上を使われると威力は半減するだけ、いとも簡単に貫通する。

なぜ使ったって?この優れた所は回復だ。

魔術を発動中に攻撃を受けても体の一部でも残っていれば必ず再生する。使用制限がないので魔力が続く限り連発できる。貫通されたら新しいのを発動しなければいけないけどな。

ヴェナードのパニッシャーが案の定レイニングティアーズを突き破りオレの体を吹き飛ばす。

が、すぐに再生する。

そしてオレはパニッシャーの爆風を利用して、ヴェナードに一気に

近づき、槍を首におしつけた。

「オレの勝ちだな。」

「……………そうだな」

こうしてオレとヴェナードの闘いは終わった。

七話（後書き）

前回のあとがきの強さが全く違いました。
家でメモったのを間違えてボツのを投稿しました。

正確には十五歳現在で魔術&宝具無しで
セリカ>ヴェナード>ジーク エクリア>魔王>>エミリオ>ア
イリス>>>勇者>>>リウイ

てな感じです。

あと、姫狩りは戦女神2の二年前との指摘がありました。
ガイドブックを買ったら確かにそうでした。
すみませんでした。

ってことでタイムスリップということをお願いします。

八話（前書き）

戦女神2が終わらない。やっと五章までいった。久しぶりだから全然おぼえてねえ。

ラテンニールはオレの嫁。
他は全部くれてやる！！

八話

「それで、お前は人間か、魔族なのか？」

オレは早速、疑問を聞いた。

パチンッ

「話をしよう。あれは今から36万……いや、1万4000年前だったか……まあいい、私にとってはつい昨日の出来事だが、君たちにとっては多分、明日の出来事だ。彼には72通りの名前があるから、なんて呼べばいいのか？確か最初に会った時は、Enoch。そう、あいつは最初から言うことを聞かなかった。私の言うとおりにしていればな……。まあ、良い奴だったよ。」

「Enoch。そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「神は言っている。ここで死ぬ定めではないと。」

「Enoch。そんな装備で大丈夫か？」

「一番良いのを頼む。」

「神は言っている。すべてを救えと。」

「やあ、私のサポートが心配なのかい？良いんじゃないかな？あいつも良くやってくれてるしね。いや、君の頼みは断れないよ。神は

絶対だからね。」

「Enoch。人が持つ唯一絶対の力。それは自らの意志で進むべき道を選択する事だ。お前は常に人にとって最良の未来を想い、自由に選択していけ。さあ、行こう。」

「ああEnoch。私の可愛い子供たちが悲しんでいる。行きなさいあなた達、弟の敵をとるのです。」

P i r i r i r i r i P i

「ああ、今回もだめだったよ。あいつは話を聞かないからな。そうだな、次はこれを見ている奴にも付き合ってもらおうよ。」

「…とまあそんな感じドウベエラバア。」

「解るか!！」

「いきなり殴るとは、ヒドい。それに早くツッコまないと、セリフの間に描写が無いくせに長いから読者が飽きるぞ。」

「メタ発言すんな!！」

オレの右手がヴェナードの顔を頬をえぐった。

「くっ、二度もぶった。母さんにはぶたれたことはあるけど、オヤジにもぶたれたこと無いのにぶったね!！」

「死ネエエエエエ!！」

アッパーで腹を殴り、蹴り上げる。そして、サマーソルトからの踵

落とし。

「グハッ。くっ、我がやられても第二、第三の我が……………」

「約束されたツツコミの剣」
エクスカリバー

「ぎゃあああああああああー!!」

くしばらくお待ちください」

「で、お前は何なんだ？」

「我はな、憑依者なのだ。」

「憑依者？転生者じゃなくて？」

「そう聞くとまるで転生者の様だな。」

「そうだ、オレは転生者だ。」

「そうか、だが我は憑依者なのだよ。」

「ふん。」

「憑依者とは、神によって元の世界から平行世界の自分へと乗り移ることだ。」

「特典とかは？」

「無い。有るとしたら多重次元屈折現象を引き起こせることと、前の世界の記憶を忘れないことだな。」

「ほ。で、いつからこの世界にいるんだ？」

「486年前だ。」

「ながつ！？」

「まだ、ゼイドラム王国が名前もない小さな国だった頃に憑依してな、一応これでも王家の者に憑依したのだ。」

「それで、ファンタジーな世界だと小さな頃に浮かれてな、剣を学んだよ。そしていつしか騎士王と呼ばれていたよ。国の中で最強とも言われてた。」

「その頃だった、神殺しのことを聞いたのは。」

「この世界がデイル・リフィーナと知ったとき我は思った。こんな力じゃあ、すぐ死ぬと、な。」

「だから我は力を求めた。そして会ったのが我と同じで力を求める魔術師だった。」

「そして、そいつと共に辿り着いたのが魔人化だった。」

「じゃあ、その姿は……………」

「そう、魔人化したのがこの姿だ。」

「だが、国は我を恐れた。魔族だからというだけで国から縁を切られて、ここに封印されたというわけだ。」

「ふん。後悔はしているのか？」

「してはいるな。毎日ここにいってもつまらんしな。」

「ならば、オレとともに来ないか？どうせなら原作介入した方が楽しいだろう。」

「ふ、確かにな。」

「なら来い。」

「分かった。お前について行こう。」

「よし、なら自己紹介だな。オレの名はジーク・マーシルン。リウイの兄で過去からタイムスリップしたらしい。」

「過去から？」

「ああ、まだ原作も始まってないしな。」

「次は我が……、我ヴェナード・ヴァルヘルミアの名にかけて、我が主君ジーク・マーシルンに仕えよう。」

「は？主君？」

「そうだ、我は貴殿を主君とした認めた。」

「まあいい、これから頼むぜ。相棒。」

「こちらこそ頼む。相棒よ。」

封印の間からでた後、地上に戻ることにした。

その途中で

「ん？あれは……………」

金髪の幼い睡魔がいた。

「ヴェナード。あれはまさか……………」

「ああ、間違いない。リリイだ。」

「ということは、魔王復活か。」

「だが、エミリオはここにいないぞ？」
今回空気が違ったが。

「どうせ僕なんか役に立たないんだ。いつだってそう。あの時だった（ry）」

うん、死にそうな勢いだ。

「じゃあ、どうなるんだ？」

「さあな、とりあえず後を追おう。」

そして、迷宮から出て原作通りに、

コケッ

「あっ!？」

ヒューン キラン ミ

「いくぞ!！」

「了解!！」

行ってみると

「まおーさま、まおーさまぁー!」

泣きそうなリリィと、

。() 。 () 。 () . . .

(つ) () (ゴシゴシ

。() 。 () 。 () . . .

「くっ………いったい、何が起こった?」

「ああ、よかった………気がついたぁ………」

「身体……私の新しい身体かつ！」

「よくやった。一時はどうなることかと思ったが、なかなかやるじゃないか。」

「……えっと……あ、ありがとうございます。でも……実は、その……あの……」

「どうした？もっと喜ぶがいい」

「お前の働きで、私は人間どもに復讐することが出来る。本来の居場所に帰ることが出来るのだ」

「……お、怒らない？」

「しつこい。それ以上言うなら本当に……」

「……………」

「あうあう……」

「……こ、これは……どういう、ことだ？」

「ば、馬鹿な……こ、この人間……ち、小さいのか？いや、それ以前にこの胸はなんだ？」

「そして、この忌々しい魔力は……」

ユークリッド王国第三王女シルフィーヌがいた。

((なんで?))

八話（後書き）

まさかの汁姫＋魔王。

すんません。調子にのりました。

あと、前回のあとがきで、2年前とかいたが、3年前です。すんません。

うん、死ぬべきだよねオレ。ちょっとベランダへ行ってきます。

オレの家ベランダねえじゃん！！
（。。（

九話（前書き）

遅くなってしまうてすみません。

そして、神採りアルケミーマイスター発売おめでとつございます!!

九話

「なんと言うことだ！！人間に……ましてや、憎き姫の身体を乗っ取るとは……」

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

「どうしてくれる！！これでは復讐もまともにできないぞ。」
「お取り込み中悪いんだが。」

「ん？お前はあの時の………久しいな。」

「ああ、久しぶりだな。そして…あの…何というか…ドンマイ。」

「そうだ。この身体、私を封印した忌々しい姫の身体なんだよ。」

オレが魔汁（魔王＋シルフィヌ）？を慰めていると、

「思ったのだが、好都合ではないのか？」
ヴェナードがそう言った。

「なぜだ！？この身体は魔力こそあれど、病弱で運動もまともにできない身体なのだぞ！！」

「だが、封印した姫となれば封印を解くこともできるはず。それに、封印を強化するときに近くに行けるから、そこがチャンスだ。」

「ほかの奴にバレるのでは？」

「そこで、魔王ごっこをするのだよ。」

「魔王ごっこ?」

「そうだ、このエミリオを魔王としてでっち上げる。そうすれば攪乱できれば隙はできる。その内に封印を解けるだろ。魔力を封じ込めておけば誰も自分たちの姫が魔王とは思えまい。」

「さすがだ!! ヴェナード!!」

「ふむ、確かにそうだな。」

「つてまで。僕が魔王役かよ!？」

「なに、魔王役をすれば強い奴らと戦えるのだぞ?」

「……………ジュルリ」

こんな短時間でエミリオを手玉に取るとは、ヴェナード恐ろしい子
!!

「ところで、その奴は何だ?」

今更?

「我はヴェナード。ジークの相棒であり、騎士だ。」

「ふむ、強いな。戦ってみたいものだが、私が負けるだろうな。」

力を見極めているな! 実は魔王って強いんじゃない?

「姫様〜？姫様〜？」

「ヤバい。じゃあな魔王。こいつはもらってくぜ。」

「キヤアアア〜」

俺は、リリイをつれて逃げ出した。

「さて、それでは第一回魔王軍会議〜」

「わ〜、パチパチパチ」

「「……………」」

ヴェナードしかのつてくれない！？

「まずは自己紹介からだな。オレはジーク・マーシルンだ。」

「ヴェナード・ヴァルヘルミアだ。」

「エミリオ。」

「ええっと、その…名前は無いです。」

「なら、お前の名はリリイだ。」

「リリイ……………うん、ありがとう!」

「それでは、エミリオを魔王としてでっち上げる。ってことでエミリオ。ここから先はお前の腕の見せ所だ。頑張れよ。」

「ああ、任せろ。」

こうして俺たち魔王軍は、クルセイダース出来上がった。

おまけ

「ヴェナード、お前は間違っている。」

「いや、ジークお前こそが間違っている。」

「なんだと?」

「我が軍はやはり睡魔族を集めるべきだ。」

「ぬかせ、ここはやはり飛天魔族だろうが!」

「ふざけるな!」

「……………普通に両方とも集めるって考えれないのか?」

「あうあう」

「よろしい、ならば戦争だ!!」

「いいぜ、どっちが正しいか決めよう。」

「死ねえええ!!」

その日の夜、ユークリッド王国は未曾有の地震が起こったそうなので……。

九話（後書き）

ジ「ジーク・マーシルンだ」

ヴェ「ヴェナードだ」

作「wasterです。いつも読んでくれてありがとうございます。」

ジ「さて、作者。何で遅れたんだ？」

作「戦女神シリーズをやっていたまして。一応zeroの一章までいきました。」

ジ「なんでそんなに時間かかってるんだ？一度やったことあるだろ？」

作「セーブが消えていて……幻燐はヘタレでやってました。」

ヴェ「だからお前はヘタレっていわれるのだ。」

作「言われたことないし！！」

ジ「DMって言われたことあるけどな。」

作「うっ……ど、DMじゃないもん。」

ヴェ「じゃあ、なんて言われたんだ？」

作「い、一般のMよりMだが、DMよりMじゃないよなって。」

ジ「意味分かん。」

ヴェ「ここからは作者の自己紹介だ」

作「好きなものはゲーム、趣味はゲーム。運動は苦手で、吹奏楽部のくせにリズムが取れない。進学校に進んだものの、赤点ばかり。ちなみに、トランペットを吹いています。」

ジ「ダメ人間だな。」

作「それでは皆さん、この次もよろしくお願いします。感想もよろしく!!」

ジ・ヴェ「逃げたな」

十話（前書き）

お久しぶりです!!

とりあえず言い訳、執筆自体は前からやっていたのですが、人生って本当にやなことが多いなと死にかけていました。本当に申し訳ない。

十話

そこは白い空間だった。

安そうな椅子がポツンと置いてあるだけ。

ただそれだけ。

それだけなのになぜか安心する。

なぜだろうか？

まるで母親に護られるように、抱かれているような。

ふと気配がして後ろを振り向く。

さっきまで何もなかったはずの空間にもう一つ椅子があり、そこに独りの青年が座っていた。

やあ、久しぶりだね。

そう声が聞こえる。

何年振りかな？まあ君は覚えてないだろうがね。

オレも喋ろうとするが喋れない。

全く君が羨ましいよ。自由でどこまでも行ける。まるで鳥のよう

に。

オレはその声をじっと聞く。

僕は翼をとられた上にかこの中に閉じ込められているようなものだしね。

聞く。

この数年間ずっと独りぼっちだったからね。どうしても年の割に年寄りのように悟ってしまうよ。ああ、退屈はしなかったよ。君の人生（映画）を見せてもらったからね。

聞いてしまう。

僕自身は役者になれると思ってたよ。だけど監督はそのつもりはなかったらしい。

聞き入ってしまう。

詐欺みみたいな物だよ。この映画の主役だと思っていたら、視聴者だったらしい。役者にもしてもらえない。

そこで目の前が暗転する。

おや？どうやらここまでみたいだ。ほら、役者は舞台に戻った方がいいよ。楽屋にいつまでもいたら映画は始まらないよ？

声だけ頭に響く。

じゃあね。次はいつ会えるかな？楽しみだよ。君もそう思わないかい？ジーク・マーシルン

「……………変な夢だな。」

オレは目覚めたと同時にそうつぶやいた。

「映画？役者？監督？なんだよそれ。」

「まったく、それ以前にアイツは誰なんだよ？」

まず、あの青年はオレを知っていた。そして、オレはアイツのことを忘れてるって言っていた。

「まあ、所詮は夢だ。」

そう言っただけでオレはベッドから起き上がった。

「【魂】ってなんなんだ？」

「へ？」

ヴェナードがいきなりそんなこと聞いてきた。

「うーん…簡単に言えば分霊箱みたいなものかな？」

「分霊箱………ってあのハリポタの？」

「ああ、少し違うが似たような物だ。魂を分割して創るしな。違うところは器を用意しないでいいところと、人を殺さなくていいところだな」

「分霊箱ってことは、今ここでお前を殺しても………」

「ああ、完全には死なないよ。ただ、魂だけになって、数時間経てば【魂】に回収されるよ」

「それで身体が修復するのを待つ………」

「いや、身体は直らないぞ」

「は？」

「だから、身体は修復しないって」

「え？じゃあ、どうするんだ？」

「奪うんだよ」

「はい？」

「身体を奪うんだよ。身体は直らないし、神核みたいにゆっくりと復活するっていう訳でもないし」

「マジか」

「マジだマジ。まじく、まじから、まじく、まじかり、まじ、まじき、マジカル、まじけれ、」

「なぜに打消推量？あと、頭脳パワー！！が混じってた気がするが……」

「気のせいだ。まあ、身体奪うのめんどいし、失敗したらこっちが消されるから、君臨すべし神々の涙を作ったんだ。レイニングティアーズ【魂】があれば、どんなに身体が消失しようが髪の毛一本で復活できるしな」

「ちなみに【魂】は何個あるんだ？」

「今、現界しているのは一個だな」

「少ないな」

「セリーヌに渡した指輪だから、壊れることはないだろう。能力付加したし」

「能力？」

「ああ、能力付加っていうは文字そのまま。オレの能力を付加して、

持ち主に効果を与えるんだ」

「で？どんな能力なんだ？」

「オレの能力は、必中、解毒・解呪、身体強化、神の加護（笑）だ。その中で解毒・解呪と身体強化を付加してある。これで病気はましになるだろう。」

「神の加護（笑）とは？」

「ニート神の、ニート神による、ニート神の為の能力。主にトラブル（原作）に巻き込まれやすい程度の能力」

「そんな能力って……」

「おい、二人とも来てくれ！！」

エミリオがなんか呼んでるな、仕事か……………

……………仕事ってきくと労働CALLINGを歌いたくなるのはオレだけじゃないはず。

「と言うことで、あそこにいる蛇を倒してくれ」

「いきなりだな、おい」

エミリオに連れられて迷宮に入り、連れてこられた階、戦闘中のようだ。

「乗り込んでいったはいいものの面倒なガキがいてな、その相手をしてたら、見事にヒドい状態になったんだ」

ああ、ブリジットか。エミリオ リリィ シルフィーヌ（魔王）で繋がっているから、魔王だと勘違いしてるんだよね。いつも違うと言っても、その魔力は忘れないってね。

え？という風に繋がっているのかって？それは知らん。

それにしても軍はエミリオ以外に指示出せるやつはいないのか……
…問題だな。

まあ、いい。今はサーペントを倒すのみだ。

「いくぞ！！ヴェナード！！」

「ああ！！」

そう言うってからオレ達は走り出した。

身体強化を使い一気にトップスピードになる。

ヴェナードがとんずらとか言ってたが、気にしない。気にしたらいけない。

そして、一気にサーペントと魔王軍が戦っているところへ割り込む。

「もうついたのか！」

「はい！」

「きた！盾きた！」

「メイン盾きた！」

「これで勝つる！」

え！？もしかしてオレって知らない？ナイトがいれば十分か？

あとお前らヴァナ行けよ…。

オマケ

「ってことでガンバレ」

「は？」

いきなり目の前にニート神が現れた。

「もう一度言ってください」

「聖杯戦争に行ってきた」

「……………なぜに？」

「私の娯楽」

みんなは知らないだろうが、ニート神はこういう奴なんだ

「まあ、いいけど」

「あ、イレギュラーね」

「……………マスターは？」

「勿論、正義の味方」

「やるならさっさとして下さい」

実際は早く行きたいだけなのだが

「その前に、これ」

紙が目の前に現れる

「なにこれ？」

「サーヴァント表」

「おいしい!？」

「大丈夫。名前と宝具しか載ってないから」

「それでも十分反則だよな」

と言いながらもペラっとみるオレ

セイバー

真名：アルトリア・ペンドラゴン

宝具：「インビジブル・エア風王結界」、カリバーン「勝利すべき黄金の剣」、エクスカリバー「約束された勝利の剣」、アヴァロン「全て遠き理想郷」

ふむ。変わらん。

アーチャー

真名：エミヤ

宝具：「アンリミテッドブレイドワークス無限の剣製」

アーチャーは抜いちゃいけないよな。

ランサー

真名：クー・フーリン宝具「ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍」

オリジナルか……どっちが強いか楽しみだな。

ライダー

真名：メドゥーサ

宝具：「ブラッドフォート・アンドロメダ他者封印・鮮血神殿」「ブレーカー・ゴルゴーン自己封印・暗黒神殿」、ベルレフオーン「手綱騎英の

サクラのサーヴァントはメドゥーサじゃないと

アサシン

真名：七夜志貴

宝具：バロール直死の魔眼

厨二キタ！！にやにやwwwwww

キャスター

真名：高町なのは

宝具：不屈の心、SLB
レイジングダークナイトブレイカー

え！？魔王だとうん、うん。なんとか勝てるさ！！……

多分、きっと、Maybe
バーサーカー

真名：鬼巫女（博麗霊巫）

宝具：賽銭箱（おさいせけん）、あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力（かてるわけねーだろ）、七夜^{「せいや」}

(|||||□|||||□)

(.....)

(|||||□|||||□|||||□)

(.....)

(|||||□|||||□|||||□|||||□|||||□)

「やめさせてください」

「い・や」

そう言うと同時にオレの真下に穴が現れる。

「いやああああああ」

そしてオレは穴を落ちていき……

「問おう、貴方が私のマスターか？」

「え？」

そこには、金髪の少女と赤銅色の髪の少年がいた。

十話（後書き）

今更ですが方言が混じっていたらすみません

ってことで復活！！皆さんお待ちしました。

そして正直に言おう！！幻燐？以降が思い浮かばない！！ってことでとりあえず幻燐？まで行きたいと思います。途中からキャラがいるだけで、全然幻燐戦争と違うになるかもしれませんが、大目に見てください。一応、幻燐戦争どうりに進める予定ですので。

最近FF14にハマっているんだ。ただ、友達居ないからソロだけど。……………グスッ

ってことでFF14友達募集中！！

Gysahlでやっております。主にラノシアで深夜ぐらいにWaster Salvadorを見かけたらどうぞ声をおかけください。

今はとある理由でPCディスプレイがないからやれないけど

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5768q/>

幻燐の姫将g.....いいえ、槍兵です。

2011年7月4日08時53分発行